―ヨット部―――

□体育会名：関西学院大学体育会ヨット部
□創部年：1938年（昭和13年）
□2025年度会員数：42人（4年6人、3年9人、2年12人、1年15人）

□同窓倶楽部名：関西学院大学体育会ヨット部 OBOG 会
＊関西学院同窓会　公認団体
□同窓倶楽部通称：KG セーリングクラブ
□設立年：不明
□会員数：506人（男性424人、女性82人）
＊物故者含む

ヨット部の発祥は1938（昭和13）年。塩田克己、竹内末一、福本宗資、塩路一郎、田路辰雄が関西学院大学ヨットクラブを発足させた。神戸・深江浜にあった軍用飛行艇製造用埋め立て地の「阪神ボートハウス」を基地として活動を開始した。

使用艇はA級ディンギー4艇。そのうち3艇はクラブ員が出し合い購入、あとの1艇は当時の心理学マッケンジー教授の所有艇で、無償貸与（実質は贈与）であった。

翌39年、早大OB中橋弥太郎氏の指導のもと、初めての合宿。十数名の参加であった。その年に九州大に定期戦を申し込む。3日間貨物船に乗り、博多へ遠征し胸を借りた。結果は惨敗。しかし同じ年に関西インカレに初出場し、初優勝を果たした。40年には関西インカレを連覇し、全日本に初出場して4位となり、九州大に恩返しができた。

41年、正式に学院から運動部ヨット部と認められる。42年には当時第2次インカレと呼ばれていた神宮大会学生選手権で初の全国制覇を成し遂げた。

43・44年は戦争のため活動停止。45年、戦争から復員した武田常弘、富田幸三郎、牧野英三、魚住一夫らが再建を始める。戦前保有していた6艇中4艇を整備するも、1艇は進駐軍に徴収され、3艇で活動を再開した。

46年、東山先生を部長に推戴。同年行われた第1回国体（琵琶湖）で第2位となる。47年、同志社との定期戦で同志社クルー2人が遭難死する事故があった。それ以来、同関定期戦は6月13日前後の日曜日に冥福を祈って開催された。

48年、横浜で行われた第13回全日本インカレで夢の初優勝を飾る。49年、練習基地を西宮から神戸商船大のお世話で深江へ移転。同年の全日本からスナイプ級が採用されたが、

関西のスナイプへの準備不足もあり、前年優勝のメンバーからほとんど変わっていなかったにもかかわらず、第3位で終わった。

翌50年と51年に全日本インカレ2連覇を達成。52年には海徳敬次郎がヘルシンキ五輪に出場、また練習基地を深江から西宮に戻した。56年に5年ぶりに全日本優勝した後、57・59・63・65・66年にも優勝し、黄金時代を築いた。個人でも62年には寺倉慎二、山下城美夫、川瀬武晴が64年東京五輪の候補選手に選ばれた。

その間には不運も相次いだ。59年に新築されたばかりの関学艇庫が61年の第2室戸台風で壊滅。再建するも62年には火災のため全焼した。さらには64年の台風20号で艇庫はもちろん保有艇も備品類も全て完全に流失する被害を被ったが、その翌年には見事立ち直り、全国制覇をしている。

以後は国体艇庫を借りて活動をしていたが、69年にようやく艇庫を再建。ところが同年からインカレが自艇レース（それまでは開催地で艇が用意され出場各校はそれを乗り回した）になり、学生運動真っ只中の大学からは資金援助もなく、資金難に陥る。そんな中でもなんとかA級1艇を建造し、スナイプ級は三洋電機の新艇を借りてレースに出場した。同年の全日本インカレは S 級5位だった。

70年は中村光雄・鎌倉政治が全日本学生スナイプ個人選手権で優勝。71年、ヨット部に初めて女子部員の石川量子（旧姓増田）が入部し、これまでの男集団に風穴が開けられた。同年 OB 会では慶大・早大・同志社との第1回四大学 OB 定期戦が西宮で始まった。

72年全日本インカレはA級5位。73年からA級ディンギーが廃止され、470級が採用された。74年には救助艇「V12」が進水し、学生たちの安全が守られるようになった。全日本インカレは S 級5位だった。

75年、東山先生が部長を勇退、新濱先生が部長に推戴され、置塩副部長が就任された。同時にヨット部 OB 会長に村上忠雄が就任。同年全日本インカレで総合優勝（S 級4位・470級 3 位）を果たし、勇信彦・渋川真一郎が470級世界選手権に出場した。また、村上会長よりレスキューゴムボート「てっちゃん号」が寄贈された。76年は濱永裕がモントリオール五輪に

ナショナルチームのコーチとして参加。全日本インカレは470級6位だった。

76年から昭和最後の88年までの成績は、79年に全日本学生スナイプ個人選手権で上田論・佐野猛が優勝。全日本インカレは88年に470級3位、S 級2位で総合3位。関西インカレの優勝は76・79・80年と86年～92年まで7連覇した。

また77年に海徳敬次郎が OB 会長に就任。86年にはこれまで部員の安全を守ってきた救助艇「V12」に代わり「新月Ⅰ」が進水した。89年に置塩副部長が退任し、森田伸一副部長が就任。創部50周年祝典が開催された。

平成の時代に入り、ヨット部にもマネージャー専門の女子部員が毎年複数入部するようになった。92年には救助艇「新月Ⅱ」が進水、細川先生が部長に就任された。94年関西インカレ優勝。98年、花崎賢吾OB会長が就任。2000年には新西宮ヨットハーバーに新艇庫（現艇庫）が完成した。02年、柴田友義OB会長が就任。

しばらく部員数の減少もあって戦績も低迷したが03年、9年ぶりに関西インカレで優勝を果たした。04年も関西インカレで優勝するも。全日本で優勝できるレベルではなく、「強い昔の関学ヨット部」を目標に、体制強化への取り組みが始まった。

03年、岡達也・小林勇基がスナイプワールド出場。同年レスキューボート（Blue Sub）を購入した。監督・コーチの強化にも着手し04年、監督に河野健二が就任すると同時に、ヘッドコーチにアテネ五輪女子470コーチを務めた雑賀秀夫（日大卒）を、併せて学生と一緒にセーリングできる卒業5年未満の若手（OB）コーチを任命。全国の高校ヨット部からスポーツ推薦入部者の積極的開拓を進めた。同年には杉田絵美・桐谷顕子が第23回ユニバーシアードに出場した。

一方、これまで関学ヨット部の強みであった高等部ヨット部の強化にも努めた。05年、高等部ヨット部は諸般の事情から廃部となったが、同年に花崎賢吾、坂東利夫、長井五郎、笠井秀人、川瀬康治が中心となり「KG セーリングユースチーム」を立ち上げた。メンバーは高等部と啓明学院高の生徒で、大学ヨット部にとっての大きな戦力となった。

また女子マネージャーは全員船舶免許を取り、救助艇を操縦してプレーヤーの海上支援を

行える体制とした。

90年～2006年の主な全日本インカレ成績は90年 S 級5位・総合5位、92年 S 級3位・470級6位・総合4位、94年470級5位・総合5位、95年 S 級5位・総合6位、2000年 S 級6位、06年470級6位などだった。

しかし06年、スポーツ推薦で入部した市野直毅・佐藤翔が全日本学生470個人選手権でいきなり優勝。創部70周年の07年には全日本インカレ470級で優勝、1975年以来32年ぶりに全日本の優勝旗が関学艇庫に飾られた。総合は6位入賞。関西インカレはこの年から13年まで7連覇中だ（13年現在）。

07年啓明学院（笠井大樹　笠田祐樹）がインターハイ優勝。国体少年男子で笠井大樹（啓明学院）西尾将志（高等部）が優勝。」

08年、松吉三郎が OB 会長就任　同年全日本インカレ470級準優勝、

09年全日本インカレ470級準優勝・S 級 6 位　総合3位。松下結・森本起代が470ジュニアーワールド出場。国体少年男子で西尾俊作・俣江広敬（高等部）が優勝

10年全日本インカレ470級5位、総合4位。市野直毅・佐藤翔が全日本470選手権及び国体で優勝し五輪候補選手に選出。

11年全日本インカレ470優勝　S 級5位　総合準優勝

12年全日本インカレ470級4位・S 級2位・総合準優勝。神木聖・尾崎（甲南大）が420ワールドに出場。インターハイで藤本智貴・藤下宗（高等部）が優勝と、強化策が実ってきている。

13年全日本学生個人選手権470級で西尾俊作・俣江広敬、スナイプ級で小栗康弘・浅原宗一郎が優勝し個人のタイトルを独占。全日本インカレは470級6位・S 級4位・総合5位。力石晶子・澤田佳那（啓明学院）が420ジュニアーワールド出場。

ヨット部　部史　編集担当者

長井　五郎 （1967 年(S42) 商学部卒）